

いわしげ もとえい
岩重 元栄

岩重医院院長（東串良町）



【プロフィール】

出身は鹿児島県肝属郡東串良町生まれで、小中学校は、地元の町立柏原小学校と東串良中学校卒業です。高校は福岡の西南学院高校を卒業、昭和大学医学部へ進学・卒業しました。

大学卒業後すぐには田舎には帰らずに、横浜にある昭和大学の附属病院の内科へ入局し、自分の専門を決めて（消化器内科）、しばらくトレーニングを積みました。

その中で、静岡県静岡の方へ一度出向で2～3年行きましたが、その後再び大学の附属病院へ戻り、3年ぐらいを過ごし、自分が33～34歳の頃、当時この地で開業していた父親が74歳と結構年だったものですからこちらへ帰ってきました。帰って来て10年くらいたちました。

こちらへ帰ってきてからは父と6年くらい一緒に仕事をさせてもらいました。高校時代以降しばらくはこちらには居なかったものですから、よく知らない・分からないところもあり、父と一緒に仕事ができることで、すごく良い導入というかオリエンテーションになりました。5年ほど前に父が他界しましたので、それからはもう自分一人ということになりました。

専門は、大学病院では消化器内科医としてトレーニングや指導を受けてきました。

現在のこの診療所が自宅兼診療所で、父がそこで働く医師でしたから、父の働く姿を見ていて、自分も医師になろうかなど考えたのだらうと思います。それは中学校ぐらいの時だったでしょうかね。

自分には兄たちがいますので、後を継ぐ・継がないは別にして、職業として医師になりたいということで目指したのかもしれませんが。それと、この地域への愛着というか、ここへいつかは帰ってきたいなという思いもありました。

【日頃の思い、経営方針など】

経営（というより運営）方針ですが、できるだけこの地域の人々のニーズに応えとらなければならないというこです。例えば、ある患者さんが入院後、癌などが進行した、積極的な治療を受けるような状況ではないという時などに早めに退院して自宅で過ごしたい、自宅で最期を迎えたいというニーズがあります。もちろんそれは、自分だけではどうしようもないことであり、ご家族の方や周りのサポートが無いと、私一人では勿論何ともならないのですが、もしそういうニーズがあった時に、それになるべく応えられるようにありたいというのがモットーとしてあります。あと、地域で生活している人たちの助けになったり、役に立てれば良いなというのが大きいです。

この地で開業していて大変だなと思うことは、この土地柄もあるかもしれませんが、やっぱりなんといっても、人を雇いたいと思ったときにぱっと来てくれないというところでしょうか。今現在は幸い大丈夫になりましたが、特に看護師さんなんかは募集したときになかなか来ていただけず、結構大変だなということがあります。

あと、経営のことを考えないといけないということがあります。何も考えずに治療にだけ専念するということできません。ちゃんお金のことを考えて経営しないといけない。従業員の給料を支払わないといけませんし、もちろん自分たちも生活していけないといけない。大学病院勤務時には正直あまりそういうことは考えなかったし、もちろん教わらなかったですからね。そこはちょっと、大変といえば大変ですね。

それに、ここの地域は老人の方の独居がすごく多いんですよね。独居じゃなくてもご夫婦だけとか、息子さん・娘さん達と同居なさっていないご家庭が非常に多いですね。全国的に見ても、鹿児島県はそういう家庭が多いみたいで、なかなか大変なところがありますね。帰ってきてご両親を看るというのも難しく、実際に看取りというところまで行くご家庭は本当に一握りだと思います。子供たちは働くところと親がいるところが一致していない。でも会社やお客さんに迷惑をかけられないのですぐに帰らないといけないですよ。そういうとこ

ろはちょっと問題なのかもしれません。

【医師確保について】

平成16年ごろに、医師の研修制度が大きく様変わりし、現在のこの医師の分布の偏りが生じ地方の病院へ多くの医師を派遣し地域医療を担ってきた大学病院の医局が衰退し、地方は正直言って大変大きな負の影響を受けています。この偏りができてしまったのをどう解消すればよいのかまだちょっとわかりかねる状況ですね。

また、この地域で頑張っている先生方も歳をとられて、退役されてとかということ、だんだん減ってきているんですね。

卵が先か鶏が先かの話ではないですけど、医師の数が少しでも多いと、分担する仕事の量自体が減りますから、いろんな仕事について、より働きやすくなるんだらうと思います。(医師の)ニーズ自体はこちらはいくらでもあると思います。

後継者ということではなく、この地域に新規に開業ということは、なかなか大変だろうとは思いますが、全く縁もゆかりもない土地から来られて開業し、うまくされている先生もおられます。言葉とかも最初わからなくて、そこから慣れるために地域の飲み会などの会合に積極的に参加したり、ここはどういう生活基盤があって、どういう考えの人が多くてということなどを進んで勉強なさっているようです。

【プライベートについて】

こちらに帰ってくる時には、結婚していたのですが、妻が都会育ちの人だったので、田舎になじめるかどうか心配でした。

最初ここに連れてきたときに、鹿児島空港までは良かったんですが、そこからバスに乗って山道をずっと2時間弱かけて鹿屋に着き、それからまた町はずれの方に30分くらいかかってようやく私の実



家にたどり着くわけですが、どんな田舎かと思って来てみたら、折しもちょうど台風が接近しており、予定通りには帰れないし、出かけられずにずっと屋内に閉じ込められて、古い建物ですから雨漏りはするし、それまで見たことのないような大きな虫がいたりして、ちょっと大変だったようです。

その時点ではまだ最終的にこちらに帰ってくるという明確な予定はなかったのですが、その後、静岡の方に一度出向・転勤になったんですね。その時、ここほどじゃないけど適当に田舎だったんです。そこでだいたい妻も田舎に慣れたというか、免疫がちょっとできたような感じでした。それがあって、10年前にこちらに帰ってくるようになった時にも、鹿屋の市街地の方に借家があったということもありますが、そこまで抵抗はなかったようです。

私自身は、平日は鹿屋の家には帰らないで、ここの診療所にいるようにしています。そんなに患者さんは来ないのですが、来られたら、ああ先生がいて良かったということがたまにあるものですからね。

子供は息子が2人おり、高校生と中学生です。

趣味は色々あるんですが、ここにいて一番良いと思うのはサーフィンですね。この診療所のすぐ近くに柏原海岸という、良いポイントがあるんです。ほかにも近隣には志布志湾沿岸に良いポイントがたくさんあります。この付近にもサーファーは結構います。高山、大崎、鹿屋、志布志からも来られますよ。鹿児島県内では薩摩半島の江口浜が結構有名ですが、ここも、よりコンスタントに波がありますし、あまり混雑しませんから良いですよ。特にこういうところに居ると、朝一とか平日の昼休みなどにも行けたりしますので、サーファーにとっては最高に魅力的です。

好きな場所や景色については、やはり柏原海岸が一番ですね。あと、ここから見た山のある風景ですね。ふるりの山というのはやはりすごく印象深く心に残っているんですね。すぐそのここから見える位置に権現山という標高300m級の山があるんですが、その山が独特の景色・景観を呈しており、とても大切に思っています。

また、僕はとても魚が好きなのですが、この辺りで捕れる魚が大変おいしんです。スーパーでも買いますが、買い物に出かける時間が早ければ、すぐ近所にある、昔ながらの魚屋さんで買ったものがやはり、断然おいしいです。新鮮で旬のものがいただけます。

これはもうアピールしなければならない

ところかもしれませんね。魚が美味しい、景色がいい、そして何ととっても周りの人がいいですね。患者さん達もそうですし、ここへ来られる患者さんでない人たちもすごく大人で温かかったり、楽しかったり、とても魅力的な方が多いなと思います。地域の清掃活動や飲み会で一緒に話をしたりすると、大変楽しいですね。都会とは違う、おおらかさとか人の好きを感じる機会が多いです。生活は必ずしも余裕があるわけではないのですが、そんなぎすぎすしていないというか、やはり結構年上の方が多く、これまでにいろいろ苦労なさって来たという人が多いからそうなのかもしれないですけど、何と言いますか、人間的にできていらっしゃる人の割合が高いような気がします。

仕事上も、患者さんとしてそういう人を相手にすることが多いので、ストレスが全然違いますよ。都会で初診で診察するのと、ここで診察するのではかなり違います。癖のある人もおられますけど、全体的にはやはり魅力的な人柄の方が多いです。

【医師を目指す大隅の子ども達、全国の医師、医大生へ】

これは何をを目指すか、何をやりたいかによっても人それぞれ異なると思いますが、ある程度、都会でトレーニングや修行をしたら、田舎に行くのもいいよと言いたいですね。大変ありがたがられて大事にされたりしますよ。ニーズが高くすごく役に立つことができると思うんです。中央・中枢部で最先端のことをやって、それで花を開かせるのもすごく素敵ですけども、それはみんながみんなできるあるいは継続できることではないですよ。ちょっとでもそういうところに疲れたなあ、となった時には、一度働く場を田舎に移されてみてはいかがでしょうか。

(先に述べたような田舎の良いところに癒されたりとかは大いにあります。大変人間らしいというかいい感情で仕事ができる、そういう環境がここにはまだ十分あると思っております。

勿論ここだけでなく、近隣の市町村にも、風光明媚とまではいかずとも、大変豊かな自然と、人情というか、人の心にあふれたところがこの辺にはありますから、ぜひ来ていただければ、悪い思いはされないのではないのでしょうか。(どの科でも) ニーズはすごくあります。

趣味やレジャーも、波乗りが好きな人、釣りが好きな人にはいいところがいっぱいありますし、花や野菜の栽培に興味のある方であれば、畑も安くて借りたりできますのですごく楽しめると思います。野菜などは自分も少し栽培していますが、野菜がだんだん大きくなったり、実ができてくるのをただ見ているだけでも結構癒されるというか、とにかく楽しいですよ。

(多少不便ではありますがこの地域には)とにかく何かしら魅力はいろいろあると思うんですけどね。



岩元 正広

いわもと耳鼻咽喉科院長（鹿屋市）



【プロフィール】

父は鹿屋市出身ですが転勤族でしたので、私は小学校は、指宿や出水、中学校は入学は指宿で、卒業したのが末吉です。高校で鹿児島市に下宿し、大学は九州大学です。

医師になろうと思ったのは、大学受験を考える頃で、身近に医療関係者はいませんでしたが、手に職を持っている方が良さだろうということと、高校・大学と仲の良い友達がいる、その友達の影響もありました。

専門は耳鼻咽喉科です。理由は学生の時バドミントンをしていたんですが、誘ってくれた先輩が耳鼻咽喉科だったんです。

大学の耳鼻咽喉科にずっといて、その間、佐世保、福岡、北九州の病院を経験しました。元々、鹿屋に帰る気はなく、大学に残るつもりだったんですが、親の病気を契機に、平成10年5月こちらで開業しました。

最初の頃は、来る人達は全部診ていて、また、手術もしていました。多い時は1日200人も患者さんが来る時もありました。さすがに200人を越えるときつくて、体を壊したこともあり、予約制にして、少し制限して、診切れない患者さんは、申し訳ないけど、他の日に来てもらったり、他を受診してもらったりしています。

【日頃の思い】

大学にいる時にめまいの研究を中心にやっていたので、めまいの患者さんをよく診ているんですけど、一人一人に時間がかかるんですよ。子どもさんも中耳炎とか多いんですよ。僕の方針としては、中耳炎で膿が溜まっているのは鼓膜を切開して出してやった方が早く治るから切開をやるようにしているんですが、それがまた、時間かかるし、押さえつけたり、顕微鏡で見たりとか、結構、大変なんですよ。

そういう大変な診療科なんですけど、5、6年前に、県立病院の鹿屋医療センターの耳鼻科が無くなっていますよね。耳鼻科の医者がいないんですよ。全国的に。研修制度が変わってですね。鹿大の方にも耳鼻科に入る人がいなくて引き上げて

しまっているんですよ。

本当は入院しないといけないような急患を送るところが無くて困っています。例えば、急性咽頭蓋炎といって、のどを詰まらせてしまうという病気があるんですが、窒息して死んでしまうような危険な病気です。そういう場合は、鹿児島市まで救急車でといても間に合わない事もあります。以前、1先生と2人で緊急気管切開というのをしたこともありました。また、脳梗塞とか心臓の病気の人は、抗凝固剤とか、抗血小板剤を飲んでいる人が多いんですが、そういうので鼻出血とかあると、なかなか止まらないんです。普通そういうのは入院させるんですが、入院できる医療機関がない大隅で耳鼻科をやっているのは大変なんですね。

全国的にも耳鼻科医になる人がほんと少なくなっているんですよ。産科小児科もそうですけどね。耳鼻科も大学とか大きな病院にいくと忙しくて、舌とかノドの癌の手術になると、癌を切除した後に、舌やノドを形成するので、長時間の手術になります。朝9時に入って夜中までかかることもある。肉体労働ですよ。それで、手術をする科に入らなくなっています。研修制度が変わってからです。地方にも残らないし、手術があるきつい科には入らなくなっている。

ぜひ、大隅地域に医療センターみたいな入院ができて（手術ができて）というのがあって欲しいですけどね。医師もいないですからね。

【医師確保について】

一番ネックとなっているのは、交通の便だと思います。食べ物はおいしいし、他の環境はいいんですけど、よそから来る人にとっては、やはり便利がいいということが大事かもしれません。今度、東九州道路が開通しますから、それに期待したいですね。

やっぱり空港から何時間もかかるとか、鹿児島市内まで行くのにフェリーに乗って云々というのは？ですよ。

よっぽど地域医療とかそういうのに志の

ある人、そういう人たちはさらに離島とかに行ってしまうと思いますね。診療科にもよりますが、やっぱり元々こっち出身の人で、都会で経験を積んで帰ってくるといいんでしょうけどね。後は、今の研修医制度を変えなければ、診療科、地域による医師の偏在は解消されないとおもいますね。鹿児島県内の拠点となる病院の医師の確保は、行政に頑張ってもらいたいですね。国立指宿病院の産科が、鹿児島大学から、派遣できなくて、九大から派遣してもらったという報道が、最近、ありましたね。鹿児島大学から派遣できない時は、他の大学に派遣を依頼するのも、一つの方法でしょうね。

【プライベートについて】

家族は今、家内と2人です。息子2人は大学で名古屋と筑波にいます。2人とも医学生です。帰って来いとは言っているんですけど、専門も耳鼻科医になるかどうかはわかりません。

息子2人はこちらの中学を卒業して、長男は鹿屋高校を、次男は鹿児島市内の高校でした。

医師確保のところで話すべきだったかもしれませんが、子どもの教育環境ということも重要な要素になるかもしれませんね。今度出来る楠隼中・高がある程度実績を出して成功してくれればいいと思いますね。

趣味は、休みにゴルフに行くぐらいですかね。大崎の大隈カントリーというのが一番近いですね。

昔はバドミントンをしていました。大学から始めたんですが、大学時代は実業団の試合とか、その後は県体とかも出ていたんですけどね。

大隈で特に好きな場所、風景というところ、うちの実家（鹿屋市南町）のところはトトロの森みたいになっていたんですよ。木が繁っていて、木のトンネルになっていました。そこがもう木を伐採しちゃっているんですが、本当にトトロに出てくるような風景で、そこは好きだったんだけどなくなっちゃいました。

知人とかが来たときに連れて行くのは、鹿屋ばら園と航空隊の資料館ですね。あそこはいつも連れて行っていますね。

それと、星がきれいですよ。実家の家を見た星がとってもきれいだと子どもたちも言っていました。

食べ物で言うと、やっぱり肉はおいしいですよ。たくさんは食べられないんですけどね。そばつゆで食べる鹿児島の黒豚のしゃぶしゃぶとかおいしいですよ。



【医師を目指す大隅の子供たちへ】

何にしてもそうだと思うんですけど、簡単になれるものはないから、一つずつ、本当に千里の道を一步からじゃないけど、一つ一つ目の前にあることをちゃんとやっていって、最後に自分のなりたいものになっていくんじゃないですかね。遊んでいたら何もできないしね。やっぱりそれなりに努力をしないと。医学部に入るのも大変ですしね。

僕も勉強はしましたよね。医学部に行くにはかなり勉強しないとイケない。僕なんかは塾とか行っていませんけど、高校時代にまずテレビとか見なかったし、ゲームとかしない、そういう時代でもなかったし、今の子供たちはゲームばかりしていますもんね。1日3時間は勉強していたと思うんですけどね。

スポーツだってそうでしょうしね、練習しないことには上手くならないですよ。何もせずに、楽をして何かしようということとは絶対できないでしょうね。医者になってからがまた勉強ですよ。あとは自分が何科を選ぶかもだけど。都会に集中しているからこういう田舎にも目を向けてくれるといいんですけどね。

医師には、患者を診る医師（臨床医）と、病気や薬について、基礎的な研究をする医師も必要です。研修制度が変わって、また、基礎研究に行く人も少なくなっていますね。高校時代からずっと一緒の友人が、名古屋大学で教授をしていて、研究をしているんですけど、研究の方に入ってくる人がほとんどいないと、嘆いていました。それも大きな問題だと言っていましたね。そちらにも、目を向けて欲しいですね。

春陽会中央病院長（肝付町）



【プロフィール】

出身は、肝属郡高山町、今の肝付町ですね。小学校は高山小学校に6年の途中までいて、大龍小学校に転校して、中・高はラ・サールで、大学は東邦大学というところですよ。

医師になろうと思ったのは、うちの父親が医者で、ここで開業していましたので、高校ぐらいですね。

専門は整形外科です。きっかけは、やっぱり親が草分け的な整形外科医だったので、自然とそうなったというか。

大学を卒業してから、鹿児島大学の整形外科の医局に入局したんですけど、途中でうちの親ががんになってしまって、それで、医者の子は継がざるを得ないというか、しょうがなく、誰もする人がいないので、まだこの病院が本当小さい病院だったんですけど、というか診療所ですね、帰って来ました。

自分は本当は研究が好きだったので、こっちの病院の診療をしながら大学病院へ4年間こっちから通って、医学博士はそれで取ったんですけど。仕事が終わってから研究だけ行って、夜中にこっちに帰って来てまた次の日に診察というような感じで。

その頃は高速道路もなかったもので、陸回りで夜中2時位に鹿大を出てこっちまで帰って来て次の日は診察してと、そんな生活でした。

最初の科の病院をつくってこちらに落ちついたのは29歳の時です。その頃に小さい新館をつくったんですね。うちの親ががんだったので、ちょっと落ちつかせてやらないといけないというような感じで、継いだよという形を示すためにつくったんですね。だけど、それをつくったおかげで縛られちゃったですね。

【日頃の思い】

僕は整形外科で脊椎と関節の人工関節とかやってきたんですけど、主に脊椎の

仕事が多くて、自分の診療をより高いレベルでやりたいと思ったものですから、東京の方で東大の脊椎の先生方と一緒に昨年来て昨年4月に「参宮橋脊椎外科病院」をオープンしたんです。

22床の小さな病院なんですけど、それをオープンして、今こちらの手術も参宮橋とインターネットでつないで、テレビ会議をする。こっちのレントゲンとかデータも向こうで見れるようになって、向こうの診療している内容もこっちで見れるようになってはいますが、それでカンファレンスをするんです。東京の方が人が集まりやすいものなんです。向こうで、色んな症例検討会をして、こういう方針で治療するとかいうことを決めます。結構大変な手術が多いので東京からも手伝いの先生方が来てくれて、こっちと一緒に手術していくというような感じでやっています。

参宮橋には毎週通っています。木曜日までこちらでフルに診療して、こっちを最終便で木曜日発って、金土は向こうに大概いて、それで土曜日か日曜日にこっちへ帰ってきて、月曜日からまたこっちで診療する。

経営方針というか、やっぱり田舎にあっても技術レベルをきちんと保ちたいというか、学術的にやりたいというのがあるので、うちの病院の内容は、去年も学会で何度も発表しました。今後も引き続き学会で発表して、海外とかにも手術研修に行く。その特徴は、カダバーオペという日本では亡くなった方に手術技術のために手術するのは許されていないんですね。特殊な大学病院とかでは許可されているところがあるんですけど、一般の医者はできないので、技術を本当は高めるためには亡くなった方のお体をお借りして色んな手術技術を磨く必要があって、それは海外のタイとかアメリカとかでは許されているので、それでここまで研修に行くんです。僕もですけど、うちの常勤の先生とか交代でですね。

田舎だけど、やっぱり技術レベルとか、学術的なレベルを高くして、こういうことをこっちでやっているよって、ある程度

ピールできるぐらい頑張りたいなというのがあります。その中で自然と日本の医療のすばらしさというのが、一般の方もだんだん分かっていたぐらい病院の内容を高めたいなという気持ちがあるんですね。

大隅地域で一番大変なのは、何といっても医師確保ですね。本当に技術レベルの高い先生方とか鹿児島にもいらっしゃるんですけど、どうしても市内に集中しますよね。ですから、田舎でそれなりのレベルできちんとやりたいと思うと中々医師確保は本当に大きなテーマの1つで、技術レベルの維持と発展、併せて、医師確保を目的にわざわざ東京に開院しました。

この地域のいい点は医師同士のつながりが濃いですよね。例えば、医師会の先生方とは本当に仲良くさせていただいて、病診連携という言葉が出てくるずっと前から、ごく普通にそれはこちらでは行われていたので、いつもこの周辺の先生と話をすると、病診連携、病病連携って今さら何だろうねって言っていたぐらいですから。

【プライベートについて】

家内が医者で、僕と一緒に住んでいます。子どもは4人いるんですけど、4人とも全部東京です。

もう長男は整形外科の医者になっています。長女も社会人で、うちの東京の病院の事務をしています。次女は東邦の6年生で、今度、医師国家試験ですね。一番下はまだ浪人中です。

趣味は能です。能狂言の能。能を15年ぐらい習ってましたので。鹿児島県の謡曲連合会の会合とかでもよく出演させていただいて。

観世、宝生、喜多、金春、金剛と5流ありますが、僕は個人的なついでで鹿児島の宝生の会に入っています。踊りも中腰でずっとやりますから結構体力が必要です。週末は東京に行ったりとか、忙しいんですが、一月に1回なので時間をつかって習っています。

来年、鹿児島は国民文化祭があるんですが、11月3～4日に能の踊りもあり、4日には出演する予定です。

大隅半島で好きな場所というと、やっぱり僕は神川の滝が好きで、それと吾平

山稜ですね。

僕は余り酒は飲まないんですけど、食材は豊かですよ。僕は田舎の人間なのでこっちの田舎そばとかそういうのが好きですが、大隅牛もおいしいし、黒豚もいいのはありますよね。伊勢エビもその内之浦で伊勢海老祭りがあるぐらいとれるし。

【医師を目指す大隅の子ども達や全国の医学生へ】

やっぱり日本の医療の世界的な位置付けというのをよく見て欲しいなというのがあります。日本はこれだけ皆保険が行き届いていて、このレベルの医療が行われているのは世界中に例がありません。

WHOの学会に行った時に、そういう話が出てくるんですけど、日本と同じぐらいのレベルの医療というのは世界中の人口で5%以内の人しか受けられないんですよ。

それを日本だけは皆保険で誰でも潤沢に受けられるんですね。アメリカだったら特殊な保険に入っていないといけないし、ヨーロッパでもイギリスとかは医療費はただだけど、病院の数が少なくて非常に大変な思いをされて、日本みたいにいつでもどこでもぱっとかかれてというのはありませんので、世界の中で日本がこれだけのことをやっていることの意味を共有できる方がたくさんいればなと思いますね。



神川の滝



大納 伸人

池田病院副院長（鹿屋市）



【プロフィール】

出身は鹿児島市です。小中高と鹿児島市で過ごし、大学も鹿児島大学です。

医師になろうと思った時期や理由については、大きな志があればいいんだけど、周りがみんな目指していたというのが1つありますね。高校、中学校時代にそういう話が多かったです。

それに、いろんなことをやるということを考えてときに、一番できないなと思ったのが自分の健康管理かなと思って、しっかり勉強して自分のことができればいいなと思ったのが始まりですけど、実際は周りに流されちゃったという感じがすよね。

専門は血液内科です。一番最初に研修医で持った患者さんが敗血症になって重症な時期もあったんですが、それを先輩と2人で診ながら乗り切って退院したということがあって、いい先輩に恵まれたというのと、患者さんがよくなられたという経験がその道を選んだきっかけです。

僕たちが大学を卒業して血液内科に入った時の治療法と今はもう全く変わってしまったので、あの頃、本当に大変で治らなかった人たちというのがかなりの確率で治るようになっていて、病気によってはほぼ抑えられるというような病気も出てきていて、今はやっていてよかったなと思っています。

平成6年ぐらいの頃はここには血液内科の先生はいらっしゃらなかったんです。この病院から非常勤で来ないかということ言われて、それで週2日来ていました。常勤で来るようになったのが、平成21年からです。

こちらに来る前は、大学の医局に籍を置いて、県内の病院に出張に行ったりしていました。

ここに来た頃は血液内科もなかったもので、こちらに来ても患者さんがゼロだったんです。朝来て、医局でちょっと話をし、病棟の患者さんを2～3人診て帰るという生活だったんですけど、3年ぐ

らい過ぎた頃からは外来が増えていますね。少しずつ患者さんが増えて、20名弱ぐらいつつ入院して、外来も毎日20名弱ぐらい診ているという状態です。

血液の治療、診断はどこでもできますが、ここで全部のことはできないので、治療については化学療法で治療ができる人のみです。治療によっては移植をしないといけないということがありますから、そういうところはここではまだやっていないです。

【日頃の思い】

血液内科については、今まで1人だったんですけど、2年前から2人になって、去年の4月からは3人になったんです。しかもここは大隅半島では1つだけなんですけど、血液内科の研修施設になっていまして、あと2人も専門医ですから、血液内科認定を取って血液内科の勉強をしたいというふうに思って来られれば、専門医も取れるというようにはしています。

それと僕がこちらに常勤になったときから比べても、各専門の先生が増えていますのでね、病院自体は、横の繋がりもやり易く、普通の世間話みたいな形で患者さんについてのディスカッションができるというところがいいところかなと思いますね。

平成6年に来たときは、整形と腎臓内科とあと皮膚科があったんですけど、今はもっとたくさんあります。ですが、総合病院じゃないので、外科がないとか、婦人科の先生がいらっしゃらないとか、そういうところが難しいところですね。

それと血液内科について言うと、この病院だけでいろいろ盛り上げていくというのが難しいですよね。鹿屋医療センターと徳田脳神経外科病院の血液内科専門の先生と僕と3人で血液セミナーというのを約5年ぐらい前から立ち上げて、年に2回勉強会とかをしています。医師だけでなく看護師やスタッフも入って、内輪というか、仲良しでやっていて、ついこの間もやりました。鹿児島県内とか県外の先生を講演者として

呼んで、みんなで聞いたりとか、演題を出してみんなで勉強したりしています。

全国とか世界とか標準的な治療とかをアップデートするためには、やっぱりちょっと中央から離れているというのが余り良くないところですので、それをどうにか補うためにそういう会をやっているというところですね。都会だともっと頻回にありますけど、ここは多くても年2回ということしかできないので。

この地域ならではの良さといえば、まずは、患者さんたちというか、地域の人たちがこちらを受診されたときに全面的に信頼して来てくださっているというのが非常に助かっていて、治療がし易いというところがありますよね。少々遠くても一生懸命来られるし、それに応えないといけないというふうには考えるところです。

【医師の確保について】

僕はなぜこっちに来たかということにもなるんですけど、移植とか積極的にやっている方ではなく、化学療法と診断を中心にやっていたので、もともと血液内科のないところで働こうかなというのが最初からあったんです。それでこちらにお世話になろうかなというふうに考えたんです。

今、鹿児島県の事情とかを見ると、鹿児島市内とかは結構ドクターが常勤で勤め始めてほとんど埋まっちゃって、新しくできるということは余りなくなっているんで、大隅半島だとまだ自分で好きなことができる、それがいいかどうかはわかりませんが、少なくとも治療とかのアップデートとかを一生懸命やるという気持ちでいて、ここで仕事をすれば、その地域の人のためになるんじゃないかというふうには考えています。

そういうふうな考えてきてくれる方が1人でもいて、その人に対して治療がしやすい環境を病院とか地区が提供してくれればいいかなと思いますけどね。

【プライベートについて】

鹿児島市内に自宅はありますが、半分こちらに住んでいます。日曜日の夜から木曜日の夕方までこちらにいて、あとは鹿児島市にいるということになります。子どもは3人います。こちらに僕が来るときに一緒に来ようかなということの話をしたんですけど、友達と別れたいと言っているものだから鹿児島ですね。休日は家族サービスですよ。鹿児島に帰っ

ていますので、子供の送り迎えとかそういうことをしています。

趣味は、自作でアンプとかスピーカーを扱っています。ここに1人でいて、夜は暇ですから、そういう時間がとれて、今、自分のアパートは全部そんなので埋まっています。ピアノもしようと思ってピアノを買って、楽譜も買っているんですけど、なかなかそこから進んでいないですね。

【大隅の魅力について】

風景については、昼間うろうろしてないので知りませんが、夜はよく鹿屋の街に出ています。飲み屋さんによく行っていきますね。魅力的ですね。安くておいしい。こちらに来て焼酎がおいしいなと思いましたよね、本当に。

【医師を目指している大隅の子ども達や全国の医師、医大生へメッセージ】

都会じゃないとできない最先端治療というのは、やれる期間というのは決まっていると思うんですけど、ある期間しかできないし、それをずっと先端で続けていける環境というのを提供してもらえると人はそんなに多くないと思うんです。

だけど、血液内科だけの話だと、今、幸い、薬がどんどん新しいのが出ていて、今まで移植をしないといけなかった、例えば、慢性骨髄性白血病というのは見つかったらすぐ移植だったんですけど、それがあつた1つの飲み薬で治療できたりする。5年ぐらいの間には命が亡くなっていた人がずっと長生きできるようになったんですね。

だから、そういうことが今後どんどん増えていくと思うんですよ。今、新しい分子標的薬剤というのがどんどんできてくるので。そういった薬剤を使って、地方でそういう薬の恩恵を受けられない人とか受けにくい人に少しでも奉仕するということはどこにいてもできますからね。だから、そういう環境を病院なり自治体が提供していただければ、頑張れると思います。それがうまくいけば、すごく充実した毎日が送れると思います。



恒心会おぐら病院院長 (鹿屋市)

【プロフィール】

生まれも育ちも、高校まで鹿屋でした。父から、お前は外に出ると遊ぶからと、出してくれませんでした。大学は、一浪して、東京の私学で、8年も通わせてもらいました。医者の子だから、周りからいろいろ言われていて、小学校の頃はおぼろげに思っていました。実は海洋学者に最初はなりたかったんです。高校生の頃、NHKかで海洋学者のドキュメンタリー番組があって、その中で船医さんが格好いい人で、けがした人をぱっぱと治すのを見て、海洋学者で医者っていうのもいい、そのために医学部に行こうと思ったのが最終的な思いでした。

大学に入った時には父が他界していたので、卒業したら帰るという思いがあり、卒業と同時に鹿大の第一外科に入局し、そこで2年間勉強しました。当時は、地域医療計画、増床の制限が始まったころでしたが、兄である現理事長と病院を大きくするという話をして、そのためには医師が足りないから帰ってくれと言われて、1年間という約束で帰りました。

でも、帰ると、こちらではまだ腹部超音波もなく、胃カメラなどの検査もやっていない。だったら自分でやろうと思ひ、それからほとんど独学で勉強しました。

兄の同級生の先生や第一外科の先輩方を検査や手術の度に呼んで、勉強して、そのうち、教授ももうそっちでやんなさいと言われ、結局そのまま、ここで26年になります。

病院を大きくしたからには、先々は研修医を受け入れなければならぬということ、専門医、指導医というのを取っておかないと、若い先生を送れないという話になってしまう。であれば自分で取ろうと、いろいろなものを取りました。(外科学会の指導医、大腸肛門病の指導医、消化器内視鏡専門医、日本乳がん学会の認定医など)

取るためにはいろんな学会に出ないといけない。学会が大隅であるってことはまずないので、双方向テレビとかで、できるようになってくれると非常にありがたいんですけどね。そういうのがあると若い先生達もこっちに残ってくれたりするんじゃないかという気はします。患者さんを何日も残してというのは難しいけど



今だったら、ス
カイクとか英会話教室
でやっているような一対一のスタイルもた
ぶんとれるんじゃないかなと思いますよ。
大隅地域で開業という大変なことと思う
のはその辺ですね。そういう専門医とかい
うシステムを維持するのは大変かなと思
います。私自身も東京、大阪、福岡とかず
と学会をあちこち回りますよ。

【日頃の思い・医師確保について】

病院のパンフレットにも書いているん
ですが、「セットアップ、中継ぎ」という
ことを大事にしています。地域には総合病
院がないから、それぞれの病院の持って
いる得意なところで連携して行くしか
ないんですよ。だから、うちの場合は、
整形と外科、消化器を含むいわゆる
一般外科とところで、救急をやっている
んですけど、やっぱりあとは次につなぐ
というのが非常に大事ですよ。

いわゆるプライマリー、1次もできるし、
2次を引き継いで、3次も一部対応が
できる、というそういうオールマイティ
な対応ができるような病院にしたいと
ずっと思っています。

でも、社会的風潮がそれを許してくれ
ない、よくあることですが、夜、来ら
れて、「私のこの病気、専門の先生に診
てください。」と、特に小児科なんか
そういう傾向が強いんですけど、そう
尋ねてこられる患者さんがいらっし
やる。専門医でなくても診られるも
のはある程度診れるものです。診て
からつなげばいいわけで、最初から、
専門医を求められても対応ができる
はずがないわけですよ。そんなにい
ないから専門医の価値があるわけ
です。

だから、そう言われるたびに僕は一
回一回そう言って患者さんたちにお話
します。

患者さんも、前もって勉強するのは
すごくいいことですが、ただ、まちが
ったものをそのまま信じ込んでいる
方も結構多い。専門医志向はなくな
らない。もう、ギスギスしたまま
でおかしい方向にどんどん進んで
しまうのかなという心配もあります。
医師も住民の方々にもやっぱりいい
関係でないと、医師がせっかくが
んばっていても、そういう関係にな
ると、もうここにはいたくないとい
う気持ちになるのかなって、地域
の住民の方々という関係でないと
医師が疲弊するだけということにな
る、最初でボ

タンをかけ違うものだから、トラブルになりやすいということですかね。

大隅地域で一番大変だなんて思うことは、次の医療機関との連絡に少し難があるという思いがあります。ある年の台風の時、停電になり、うちの自家発電もダメになった際、クモ膜下出血の若い女性がうちまでは何とか救急車で運ばれてきたんですが、鹿児島にも、都城にも走れない、自衛隊も飛べない状況でした。鹿屋市内の他の脳外科のある病院も自家発電がやられて対応ができないという状況で、6時間ほど経ってから、ある病院が電気が回復して受けられますよって言ったんですけど、やっぱりだめでした。そのときに、台風災害とはいえ、搬送の手段がない、やっぱり、大隅（鹿屋）は陸の孤島なんだなと思いましたね。やはり、3次対応できる病院というのがあればと思います。

地域住民との触れ合いとしては、年に1回夏祭りというか、健康フェスティバルというのを9月の第1土曜日に行います。今年で7回目、昨年はちょっと病院の工事でできなかつたんですけど、今年3年ぶりということで、地域から3千人くらい集まっていたって、非常にありがたかったですね。僕が手術した人が孫が生まれたって行って一緒に連れてきたけど、娘さんも手術しているんですよ。親子三代というのがちらほら出てきている、そういうのは非常に励みにはなりますね。

常勤の医師は、今、私を含めて18名です。それに加えて、大学から日替わりで来られる先生方が数名ですね。先生たちにずっといていただくためには、子供さんの教育が大事です。特に中学に上がるときにというのをよく聞きますね。そういう意味では、うちでは、24時間の院内保育に取り組んで10年以上になります。今年、病院建て替えのついでに保育所を広くしました。これからプラスαの付加価値を考えている所です。

医師確保については、基本的に大学から交代で来られる先生を除き、7名の就職されている先生がいますが、この先生がやめるとなると、探しに走らないといけないんです。募集ということではなく、原則、足で探して、実際にお話をしてからというふうにしています。だから、もう学会等に行くときには、大学の同級生とかに、こういうやついないかっていうのを聞いて行って、そこで会って話を

して、こちらに来て頂くこととしています。

【プライベートについて】

子どもは、一男三女で、長女が岡山の大学、長男はうちで働いており、次女は、鹿屋高校、一番下は小学校1年生です。

趣味という趣味はないんですが、最近凝っているのは、一番下の子と一緒にゲームセンターに行つて、UFOキャッチャーでぬいぐるみをとるのが楽しいですね。それと、好きな場所というか、毎朝7時くらいには病院に来ていますが、ストレスがたまったときは、6階の屋上というかベランダで、「わあー」と1回叫びます。ちょうど、鹿屋の盆地が見え、すごく気持ちが良い、一瞬大声を出すんですが、結構、ストレス解消になりますよ。

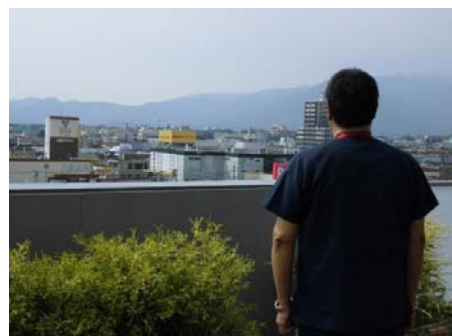
焼酎は好きで、銘柄にこだわりはなく、地元の「小鹿」や「大海」ですね。また、大学の忘年会なんかで焼酎を持って来てくれつて結構頼まれるんですよ。食についても、鹿屋は食べ物屋が多いけど、大体当たり外れがなく、安くておいしく食べられると思いますね。

【医師を目指す子ども達、全国の医大生、医師へのメッセージ】

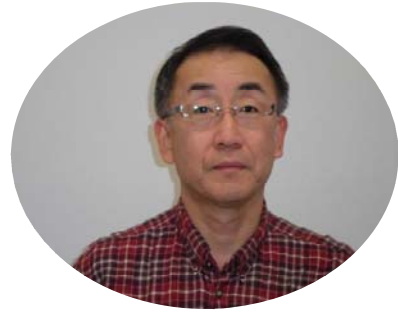
一番大事にして欲しいことは、「人を診る。」ということです。みんなが思っていることなんだと思いますが、患者さんを診ないですぐ病気のことだけというのも本当に多いし、研修医の先生方最初からそういうのって無理だとは思いますが、とにかくまず患者さんと話をするというのを一番最初に心掛けて欲しいです。

あと、できれば大隅の子供たちに帰ってきて欲しいというのはありますが、帰ってくるんだったら、思いっきり勉強してから帰ってきて欲しいです。帰るということは義務じゃないし、十分勉強して満足してから帰ってきてほしいなと思います。大隅は食べ物 genuinely 豊富なところだから、とりあえず食うには困らないですよ。

(病院6Fから)



尾郷クリニック院長（曾於市）



【プロフィール】

僕は、北九州市生まれです。初めて鹿児島にかかわりができたのは中学、高校とラ・サールで過ごした6年間です。その後、九州大学に入学し、もう鹿児島に住むことはないだろうなと思っていましたが色々な巡りあわせで現在、末吉町で開業しています。

医師にと思ったのは、高校生の頃ですが、強い動機はなかったです。医師になる同級生が多かったので影響されたのかもしれない。

専門は内科です。なかでも膠原病とかリウマチとかを治療していました。原因がよくわかっていない分野なので興味がありました。表現が難しいですけど何か不思議な病気というものに興味がありましたね。今は、一般内科みたいな感じです。

大学を卒業し、そのまま医局に入り、福岡県内の病院をいくつか回っていました。ここに来る前は新小倉病院というところにいました。

鹿児島に来たのは妻の実家が末吉町なのですが、妻の従兄にあたる先生が急に亡くなって、そこを手伝って欲しいということで来ることになりました。4～5年ぐらい手伝ってまた福岡に帰ろうかなと思っていたのですが、なぜかずっと居ついてしまい、10年ぐらいたったときに、今度は近くの開業医の先生が高齢で辞めるから後をやらないかという話があり、じゃあ開業してみようかなということになりました。

【日頃の思い、経営方針等】

僕は大層な考えで開業したわけではないし、医師が患者さんにすることは決まっていますので、診療にあたり考えていることは、患者さんに相談されたらそれに真摯に答える。また自分で診療できる範囲でなければ適切な病院を紹介する。あとは、患者さんの話をよく聞くことですかね。

こちらで開業して思うことは、医師が本当に少なくなり困っています。僕が来たのは平成11年でしたが、曾於医師会立病院にはまだ内科も脳外科もあったのですが、研修制度が変わったことも影響して、診療科がどんどん減っていきました。また、地域の医師の高齢化の影響もあると思います。例えば、産科医の高齢化に伴い、曾於医療圏域でお産ができる病院がなくなっていました。隣の宮崎県都城市は病院が多いのですが、都城医師会病院もまた曾於市から遠方に移転するということもあり、曾於医療圏での医師不足は深刻さを増していくものと思われま。

【医師確保について】

子弟の教育環境が課題の一つとなっているかもしれませんね。僕自身、子どもが大きくなってくると、子どもたちを鹿児島市内の学校に出すために鹿児島市と末吉町とを往復する生活になっています。

他には医師不足で医師自身が病気になったときが心配というような声もあります。医師会病院の脳外科がなくなったとき、隣の歯科の先生に「僕が倒れたらどこに行けばいいのかな」と言われたことがあります。また末吉町では今年お一人先生が亡くなられて、休日当番医がもう今まで通りに回しきれなくなっている様な状況です。

何か問題点ばかりで、いい話が出来ないのですが、大隅地域は本当に穏やかで暮らしやすく、自然に恵まれた良いところだと思います。都会にばかり医師が集中してもしょうがないから、医師がいないところに来るというのは理にかなっていると思いますがなかなかそうはいかないようです。

田舎に住む決心がつかないことには、何か理由があると思います。知り合いがいない、何か欲しい時に欲しい物が手に入らないとか、そういうことだけではないと思いますが、漠然とした不安があるのかもしれない。

それと、田舎に住む決心がつかない理由の一つとして、医療技術というか、医療の

進歩に取り残されるという恐れもあるかもしれませんが。自分自身も感じます。でも最先端の医療というのは確かに必要だけど、開業医が相手にする年齢層というが高齢者、超高齢者が多いんですよね。これらの患者さんにいわゆる最先端の医療というのがどこまで必要かという疑問点もあります。

僕が入局した医局の教授が、内科医というのは、患者さんにどれだけ満足して死を迎えさせることができるかということが一番重要だというようなことを仰っていましたが、確かに超高齢者社会になりますと、最先端の医療よりも、どのように最後を迎えるかが大切だということが身にしみてわかります。

医師確保策の一つとして、これは同じ医師会の先生も以前お話しされていたことですが、高齢になり閉院する先生の土地・建物・施設などを引き継ぐような仕組みがあったら良いと思います。新たに、土地を買って建物・設備となると相当な投資になり大変ですので、開業医を増やすためにはそのような取り組みも必要かもしれません。

【プライベートについて】

鹿児島市とここを行ったり来たりしていますが、妻と子ども2人は鹿児島市です。高3の息子と中3の娘で、今年2人とも受験だから家に帰ったときは静かにするのが私の仕事です。鹿児島へは週に2～3回帰ります。

趣味として、釣りによく行っていたのですが、開業してから全然行けなくなっていて、ちょっと寂しいです。開業以前は宮崎県串間市の知り合いの方が船に乗せてくれてよく行っていましたが、家族が鹿児島に移ったということもあり足が遠のいてしまいました。

今の趣味は、休日に泳ぐことです。曾於市民プールか、鹿児島市内のプールに行っています。

好きな場所というと、串間の海ですかね。それこそ死ぬ前に思い出さだろうなと釣りをしながら思っていました。今は桜島ですね。高速道路で通勤しますから、走りながら、桜島の灰の行方を追っています。海もきれいですよね、錦江湾も釣りにはいいと思うんですけど、なかなか行く機会がないのが残念です。



(桜島夕景)

食べ物と言うと、大隅だったら肉ですね、肉はうまい。魚は、福岡も結構うまいですけど鹿児島もうまいですね。それと、東京育ちの妻が言うには、鶏肉が全然違う、絶対美味しいと言っています。

【医師を目指す大隅の子ども達へ】

子ども達に伝えたいことは、医師という職業は悪くないよ、頑張って医師になって地元の医療に貢献して下さいということですよ。私の場合は年をとってからの方が医師になって良かったなと思うことが多い気がします。私は初め精神科医になろうと思って医学部へ入ったのですが、結局内科医になりました。18歳くらいの時に抱く熱い気持ちは医学部に入り医学を学び様々な患者さんに接する中で変化していきます。患者さんに医師として育てられていると言えるでしょう。開業医になろうが、大学で最先端の研究をしていようが、医師になった人は、この職業を選んで正解だったと思う人が多いのではないのでしょうか。医学部に入学するのもその後のトレーニングもかなりハードですが、医師になる気持ちがあってもある人は将来の選択肢の一つに加えてみてください。この仕事を選んで良かったと将来思えると思います。

私、個人としては今後もこの仕事をできるだけ長く続け地域医療に貢献していきたいと思っています。

おばま やすひこ
小濱康彦

おばま医院院長（鹿屋市）



【プロフィール】

父が鹿屋市（旧吾平町）出身で、ここで内科、小児科の開業医でした。昭和32年生まれで、鹿屋には小学校4年までいて、その後鹿児島市の小、中学校を卒業しました。高校には行かないで福岡で予備校みたいな学校に行き、結局、大検を受けて19才で金沢医大に行きました。

医師になろうと思ったというよりも周りがそういう雰囲気もあり、ならないといけないんじゃないかという思いもありました。たぶん、鹿屋にはそういう2代目の医師がいっぱいいると思いますよ。

大学を卒業して、鹿大の泌尿器科に入局後、今給黎病院、鹿児島市立病院、垂水中央病院と経験を積み、垂水からここに帰ってきました。平成5年で、病院を建て直すと同時に。その後、父が病気で倒れまして、どうしても内科、小児科も診ないといけなくなり、今は、泌尿器科もやっていますが、内科、小児科がメインとなっています。

【日頃の思いなど】

日々の診療では、自分で診られる範囲は診るが、専門性の高い場合は、対応できる病院を紹介するというをしています。各病院と顔が見える関係になると送りやすくなります。県病院の中尾院長の時代に、当時の池田会長が話し合われて変えてきました。医療資源の少ない地方はそういった連携を取らないとどうしても難しいと思います。

私の持論なんですけど、大隅半島はいくつかの大きな病院があればいいと思います。例えば、県病院、大隅鹿屋、池田、おぐら病院というような病院があって、そこが、後方支援ということで患者さんを取ってくれる、いくつかの病院があって、かかりつけ医師とやりとりをするように、ゆくゆくは、そういう形に変わっていくんじゃないかと思います。

私自身、夜間急病センターを立ち上げる際に、病院と開業医とに区分され、そこでやりとりをしている釧路まで見に行ったときに思いました。大隅の場合、医師がなかなか来てくれないので、少ない医療資源でどうするかということが課

題です。夜間の当番医をすることで24時間働き、自分の患者さんも診るとなると36時間となりますが、自分たちも10年、20年前は若かったからできた。でも、年を取って耐えられなくなり、現会長の前田先生が一生懸命がんばって夜間急病センターができました。ここで新規開業しようと思えば夜間は夜間急病センターに行ってもらい、重症の場合、後方支援病院に送るわけですから、たぶん楽だと思えますよ。

元々、夜間急病センターは県病院の小児科を守るためということでもありました。当時の県病院の小児科は夜遅くまで外来診療をせざるを得ない状況にあり、当時県病院と医師会が話し合い、一次医療としては医師会が診て、入院の必要な患者さんや、内科医では確定できない患者さんを県病院が引き受けるということになりました。県病院とつながりができて今も継続していることは非常に良かったと思います。

また、帰ってきたころは、心臓の病気になる鹿屋市へという地域でしたが、今では心臓カテーテルができる施設が5施設ぐらいありますから、充実してきているのではないかと思います。

ただ、医師会長時代から思っていたのは、産婦人科です。もう、大隅では3つの民間医療機関と県病院しかない。民間の後継者はいないんですよ。大隅半島はだんだんインフラも整備されてきたけど、お産ができなくなれば過疎化は一層進むし、町は衰退していくばかりだと思います。お産ができる体制をつくれればまだまだ人は増えていくとは思っています。

産業については、付加価値を高めた6次産業をということで、県が農産物の加工センターを整備している。そのためにも、お産というものができなくなることが一番危惧される場所です。今、鹿屋市が中心になって4市5町の首長さん等で、いろいろ協議していますが、具体的な対策が出てくればいいですね。

【医師確保について】

女医が増えており、その方々が働きやすい場所をつくらない限りは問題は解決しないと思います。こちらに来てもらうために

は、子育てのこともできて、また学校のレベルも関係してくる。子どもさんが中学校に入るころ転勤とか、単身赴任ということはよくあります。

今度、楠集中・高が開校しますが、医学部を目指すような学生さんにぜひ来ていただいて、管外からも入っていただいて、大学は県内外いろんなところがあるだろうけど、最終的には帰ってきていただければと思います。

田舎が好きかどうかにもよりますが、住むにはいいところだと思います。ただ、今度、高速道路ができますが、アクセスが問題ですよ。僕は友達に、鹿児島市内に行くときにフェリーに乗ると言ったら、お前のところは離島かと言われますよ。

産業振興による人口増も必要だと思います。食料基地にするんだったら、大隅半島全部を基地にしないといけない。郡部の人口減少は大変です。鹿屋だけじゃなくて周りも全部増えていかないとだめだと思います。

観光にしても、佐多岬が今度整備される。展望台も新しくなる。その際、どれほど観光客が来てくれるかが重要だと思います。僕は趣味で自転車もやっていますが、大隅地域は自転車が走りやすく人を呼べるんですよ。ロードレースをしなくてもこの辺をサイクリングというか、ロードバイクで走るのにはすごく走りやすい。僕の友達でプロの子たちがいますが、都会では車から「邪魔だ。どけ！」と言われるけど、こっちで走っていると「頑張ってください」と声をかけてくれるそうです。だから、自転車の好きな人たちは輪行とって、電車に自転車を積んで田舎に持って行って、走ってまた帰っていくということをしているんですよ。だから、関西と結んでいるフェリー「さんふらわあ」をうまく使うことで、こちらに来てもらうことはできると思います。ただ観光客に来てくださいますよ。来ませんよ。



(フェリーさんふらわあ)

【プライベートについて】

妻と娘が2人です。妻も医師で、沼津市出身で、両親も弟も医者でした。娘2

人は医療とは違う分野で働いています。

自分たちもいろんなことをしてきたので、好きなことをさせました。

趣味は、多趣味で、ゴルフや海が好きで、一級船舶免許を持ち船も持っていて、ジェットスキーにも乗ります。あと5～6年前から、鹿屋体育大学自転車部と知り合って、自転車もいろいろしています。でも、会長をしているころは忙しくて、なかなか休めませんでした。今はゴルフですかね。地元のゴルフ場や宮崎まで行ったりします。

大隅で好きな風景というと、古江の船山を降りていくところから見える海、開聞岳や夕日が見えるところが好きです。星もきれいで、輝北の上場公園もいいですね。子どもが小さい頃、何回か行きましたが、大きな望遠鏡もあり、流星群のときは家族で夜中に行きましたよ。



それと、食べ物がおいしいところも自慢です。

(輝北天球館)

魚、肉、野菜類なんでもおいしい。体育大学と連携した鹿屋アスリート食堂もでき、東京にも2店舗つくりました。将来、全国に100店舗と計画されているので、実現すると鹿屋、大隅という名前が全国で認知され、そして、鹿屋、大隅ってどこかなと興味を持ってもらえたらありがたいですね。

【医者を目指す大隅の子供たちへ】

僕らのころは徒弟制度みたいで、先輩にくっついて、夜何時だろうがずっと働いていました。父の背中、姿も見ていたのでそういうのが医師だと思っていたんですが、最近が変わってきているという人も多いようです。いずれにしても、きつい仕事であるということを感じながらも、絶対やりがいのある仕事ですから、やはり目指してほしいと思います。

【全国の先生方、医大生の方々へ】

一番来てほしいのは産婦人科です。日本全国どこもそうだと思いますが、地方で子供が生まれないというのは、地域活性化という国が目指しているものとは全然真逆になります。ぜひ先生方のお力を拝借して、地方から子供たちが生まれていけば、人々もまた地方に戻ってくるということが起こるので、ぜひ協力をしていただきたいと思っています。

かみむら えり
上村 英里

南大隅町立郡へき地出張診療所
(南大隅町)



【プロフィール】

鹿児島市の出身です。小・中・高ずっと鹿児島で、大学は自治医科大学を卒業しました。医師になろうと思ったのは、小学3年生のときに父方の祖父を肝臓の病気で亡くしているんですが、その亡くなった日に「私、お医者さんになる。」と宣言したらしいんです。私も何となくそれは覚えているんですが、それからばかの一つ覚えじゃないですけど、もう医師になるっていう頭で、それしか見えなかったんですね。

初孫で祖父にはかわいがられており、おじいちゃん子でした。ずっとべったりだったかもしれませんが。そういうことも影響しているのかなと思います。

自治医科大へ進んだのは、医師になることについて、中学校・高校の時、いろいろ本を読んで、最初は、自分が役に立っているのは何だろうと思ったら国境なき医師団をと考えたんです。

でも、高校1,2年生ぐらいのときに、母方の祖母と同居していたんですけど、甑島出身の祖母から、「英里は国境なき医師団と海外に目を向けているけれども、甑島とか、鹿児島にもお医者さんが足りないところがあるよ。そういう所の医師を育てる自治医科大学という大学もあるから、そこを目指してもいいんじゃない。」と言われたんです。

それで自治医科大学を調べたら、建学の精神として「医療の谷間に灯を灯す。」というのがあり、これだと思いました。ちょっと学力的には？と思ったんですけど、運よく受かって今に至る感じですね。

自治医科大を卒業後は、基本的には県病院ですね。1年目が北薩病院、2年目が大島病院で研修医、3年目でまた北薩に戻って実務研修をして、4年目が鹿児島赤十字病院で、9月まで勤務をして、その後、1人目の子供を産むために産休・育休を、子どもが1歳半までとったので、多分2年ぐらいのブランクがあって、平成25年の4月からここに赴任しました。

正直、大隅地区に足を踏み入れるのが記憶のある限り恐らく初めてなんです。どんなところなんだろうと思いつつも、自治医大だから田舎に行く覚悟はできていたんで、私自身は山の中かなという感じで来ました。でも、主人は、鹿児島市出身で、県外にも出たことがないので、かなりカルチャーショックだったみたいです。特に伊座敷から郡に上がる崖を見て、まさかこれを越えないよねって思っていたら、この上にあるんだということはかなりショックを受けていましたね。

今は総合内科という形で診療に当たっていますが、希望は産婦人科なんです。ただ、専門医とかは全く持っていませんのでこれからですね。

【診療所での思い】

鹿屋とか東京とかに勉強会に行った時に、「連携がうまく取れない。」という悩みを多く聞くんですが、こちらは田舎の診療所なので、マンパワー不足は問題ですが、その分、顔が見える関係なので、診療所内もそうですし、役場(行政)とか、各病院、介護福祉関係の施設、地域包括支援センターの方とか、そういった他の業種の方と顔の見える関係が作りやすいので、その辺りの連携は取りやすい、それが自然とできているところは自慢するべきところだと思います。

今、ここにいて大変だなと思うことは、高齢化率がやっぱり鹿児島県下1位なんです。平成25年で約45%弱だと思うんですが、高齢者の患者さんが多くて、認知症もその中で一定の割合でいらっしゃるの、普段の診察はいいんですけど、何かあったときに家族との連携が取りづらい。例えば、急変したり、ちょっとここの診療所では診れないので他のところに検査に行きましょう、入院しましょうとなったときに、そこまで付き添って行く家族がいない。その代わりに親戚じゃないけど、近所の方が面倒を見てくれたりとかして何とかなっているところはあるんですけど、キーパーソンを探すことに今すごく苦慮していますね。

そういう状況では、多職種連携に突破口を見つけています。ここに勤めている看護師の中にはこの地域の方もいるので、その看護師とか、事務の方とかに、この患者さんの親族関係はどうなっているとか、個人情報なんてもうほとんどないようなものなので、その辺の情報をつかみながら、じゃあどうやってマネジメントしていったらいいかなと考えながら診ています。

それと、頭を悩ますところでは、認知症の患者さんが結構多くて困っていますが、今は、肝属郡医師会立病院のI先生が物忘れ外来をされていて、そこにつなげられることができれば、かなりうまく回っていくことが多いです。その他の面でもお世話になり本当に肝属郡医師会立病院にはもう頭が上がりませんね。先生方は診療所の自治医大卒業生を育てようという意識もあるんだと思うんですよ。すごく分かりやすい返書で助かっています。相談もしやすいです。本当にお世話になっています。

あと鹿屋市のI病院の院長先生も、私が赴任したばかりのころに電話等でいつでも困ったら連絡をしてと言ってくさるなど、そういう先生たちが何人かいらっしゃるって感じがあって、本当に心細いんですけど助かりますね。

【地域住民とのふれあい】

来た当初にまず歓迎会がありました。学校の先生方の歓迎会ではキダカ（ウツボ）の姿煮みたいな鍋が出るそうですが、さすがに私の歓迎会の時はそれは出さず、とにかく大きい、私の拳以上ぐらいあるお野菜をごろごろと集めてきて作った煮物が出ました。好きなものをどんどん食べてという感じでした。

また、患者さんとして診療所に来るときは、どこが痛い、どこが苦しいとか、みんな病気、病気しているんです。でも、地域のお祭りのときに患者さんの姿を見て、いつもこんな元気なんだって思ったり、何か普段の姿が見られて、そういうところもやっぱり地域医療のおもしろさだなと思いました。出店の売り子を患者さんと一緒にしてみたり、そういうのもおもしろかったですよ。

一番お世話になっているのは、娘が病気のときです。保育園で熱が出たときは、地域の子育て、孫育て、もう熟練している方々がご自宅で預かってくださるんです。それが一番ありがたいですね。

【医師確保について】

医師をここに連れてくるのはなかなか難しいと思います。地域住民の健康寿命を延ばすために大事なことで、多分医師がする治療介入じゃなくて行政がする予防のほうが大事だと思うんです。

その辺りであれば他職種との連携はうまくいっているんで、保健師、看護師、栄養士さんとか、潜在的な方とか、そういう方たちとうまく連携していくことに糸口があるんじゃないかなと思っています。

とにかく医師は足りないんで、まず、今ここにいる他の職種の人材でできることは補いながら、働きやすい環境をつくっていくことが重要かと思っています。

医師は診察以外にも事務仕事や各種会議出席など結構多いんですよ。書類仕事も正直、県病院とかだとクラークさんがついてくれてある程度こなしてくれるところもあるんですけどね。

他職種との連携で言うと、例えば、生活習慣病の方が多く、栄養指導が大事だと考えて、外来で来た患者さんに口頭でしようと思ったんですけど、何分、患者さんが予想以上に多過ぎて、一人一人時間をかけて栄養指導というのがちょっと難しかったんですよ。

そこで、町では乳幼児健診の時、離乳食の指導等を保健師、栄養士さんがやっているんで、行政に頼めば、空いた時間をつくってもらって、生活習慣病の方の栄養指導もできるんじゃないかと思ひ話をしました。マンパワー不足で完全に軌道には乗っていないんですけど、この人は栄養指導が必要だなと思う患者さんをピックアップして、その情報を町に提供し、保健師等がお宅を訪問し、家の状況、食事・栄養状態等を把握した上で、その人に合った栄養指導を行うということをしていきます。

病院でする栄養指導って、あなたは糖尿病だからカロリーはこれぐらいですよ、結構きちきちとしているんですけど、実際家に帰って守れる人は少ないですよ。

高齢者なので、そんなにきっちりとする必要はないと思いますが、食事をちょっと変えるだけで、検査データがや体調が良くなるんだということを知って欲しいという思いで、保健師達が頑張ってくれています。

それでも、健診の時期など個別訪問ができなくて、どうしようかなと思っていたときに、肝属郡医師会立病院の栄養室でも対

応できるかもということ今ちょっと事業が始まっているところです。

【プライベートについて】

子どもは一人で今3歳になりました。ここから車で10分ぐらいのところにある保育所に通園バスで通園しています。

主人は、肝属郡医師会立病院の泌尿器科勤務です。この診療所の裏に宿舎があり、通勤しています。完全に私の勤務につき合わせている形になっているので、主人は大事にしないといけないなと思っています。

趣味は、今ほとんど何もしていないですけれど、絵を描くことと、主人と共通でスキューバダイビングを大島病院時代にはしていました。高校、大学では美術部で油絵とかを描いていたんですが、今は全然描いていませんね。

スキューバダイビングは年に1回ぐらい潜れたらいいなと思うんですが、台風で大概飛ばんですね。夏休みに奄美大島に行ったけど台風でとても潜れませんでした。あとはドライブとかも好きです。こちらにもダイビングショップはあるんですけど、不定休な感じで、いつやっているか分からないので行ったことがないんです。

今現在続いている趣味というか、やっていることは、子どもとあちこち行って遊んだり、旅行したりとかですね。あとは温泉へ行ったり、料理を作るのが嫌いではないので、ちょっといろいろたまったときは土日まとめてわあって食事を作って、その間に主人が子供を見ていたりしていますかね。



料理は没頭できるから良いですね。いろいろ忘れられるので、料理のことだけを集中するので。絵を描くときもそんな感じで、それだけに集中するので。切り替えですよ、どうしてもストレスが多い職場なので、どこにいてもだなと思いました。病院にいたら病院にいたで、診療所は診療所でいろいろストレスがないわけじゃないので、休日はオンオフつけられるときはつけるようにしていますね。

大隈半島で、好きな場所とか風景とか、何かおすすりな場所というところ、いっぱいありますけど、佐多岬の風景もきれいですし、霧島ヶ丘公園とか、大隈広域公園とか娘が大好きなので行ったりします。

それに、うちの家族は食べるのが好きなんですよね。結構あちこちおいしいものを食べて回って、この辺だとお魚のおいしい店がいっぱいありますね。夏場には予約しないと入れないお店もありますよ。お肉のすごくおいしい精肉店やおしゃれなカフェもありますね。志布志のハモ祭りもおもしろかったです。ハモカツバーガーもありましたよ。

週末はよく家族で食べに行きますね。野菜がすごくおいしくて、主人と娘がトマトとピーマンが苦手だったんですけど、これはもうクリアして食べられるようになりました。

【医師を目指す大隅の子ども達へ】

大隈地域は、私も初めてこの地に入るときは、どんなイメージって何もイメージもなくて入ったんですけど、住めばすごく人も良いし、食べ物もおいしいし、すごく良い環境なので、大隅出身の方にはそれに自信を持ってぜひ帰ってきて欲しいなと思いますし、患者さんがすごく優しいですし、都会みたいなささんだ感じはないので、ぜひここにいらっしやっただきたいと思っています。



大隈広域公園

垂水市立医療センター垂水中央病院
循環器内科部長（垂水市）



【プロフィール】

医師になって17年になります。実家が垂水で、中学校までを垂水で過ごしました。父が開業医であったことも、医師を目指したことに少なからず影響しています。大学卒業後、鹿児島島の医療に貢献したいと思い、鹿大の第一内科に入局しました。専門は循環器内科です。

入局後は、大学病院勤務だけでなく、鹿児島市の市立病院や医師会病院などの中核病院や、地方の病院をローテーションで回りました。鹿児島県は離島も多く、奄美大島でも9か月間働きました。地域ごとに特色のある自然や生活文化に触れることができたのは、貴重な経験でした。

垂水中央病院での勤務は4年目になります。自分が生まれ育った場所で医師として働きたいという、幼い頃からの夢がかなったわけです。

【日頃の思い】

垂水中央病院は、垂水市の医療のいわば中核病院で、救急や急性期の診療を行っています。加えて過疎化や高齢化のため、在宅支援や老人医療にも力を注いでいます。そのため、専門分野の患者さんだけを診るのではなく、各科連携を取りながら、多岐にわたる疾患に対応する毎日です。専門にとらわれない幅広い医療ができますので、総合診療医向けの病院と言えます。地域医療に興味がある人にも是非お勧めしたいです。

やる気さえあれば、学術面でも積極的に発表の機会を与えられるので、医師として広く経験を積むという点でも、大変恵まれた環境にあります。

また、看護師さんやリハビリ療法士さん、放射線技師さん、生理検査技師さん、事務の方など医療スタッフとの連携もスムーズで、日々働きやすいと感じています。

【プライベート】

鹿児島市の自宅からフェリーで通勤しています。船に乗っている片道40分は本を読んだり、音楽を聴いたりして過ごせるので、ちょうど良いリラックスタイムになっています。天気や気分が乗れば、フェリー乗り場までの行き帰りにウォーキングすることもあり、運動不足の解消にもなっています。

病院には併設された宿舎があり、患者さんの容体が悪いときや、仕事が遅くなったときなどは、そこで過ごすことができ、臨機応変に対応ができますので、不便は感じません。

趣味はしいて言えば読書で、休日の本屋めぐりを楽しんでいます。温泉も好きです。日頃は忙しく、なかなか遠出できませんが、その代わりに宿舎に引かれた温泉のお湯で疲れを癒しています。

垂水のおすすめスポットは、何といても猿ヶ城溪谷です。小さい頃学校の遠足でも訪れましたが、今はキャンプ場ができたりして整備されています。研修医や学生さんたちのリフレッシュに案内することもあります。

また、大隅は魚や肉、野菜の産地で、まさに食材の宝庫です。時間があれば漁港まで出向いて新鮮な魚を買いに行くこともありますが、スーパーの食材でも十分新鮮です。垂水はカンパチの養殖が日本一です。美味しい刺身や煮魚をいつも食べられて、本当に幸せです。



垂水のカンパチ

【医師を目指す大隅の子ども達や全国の医学生等へ】

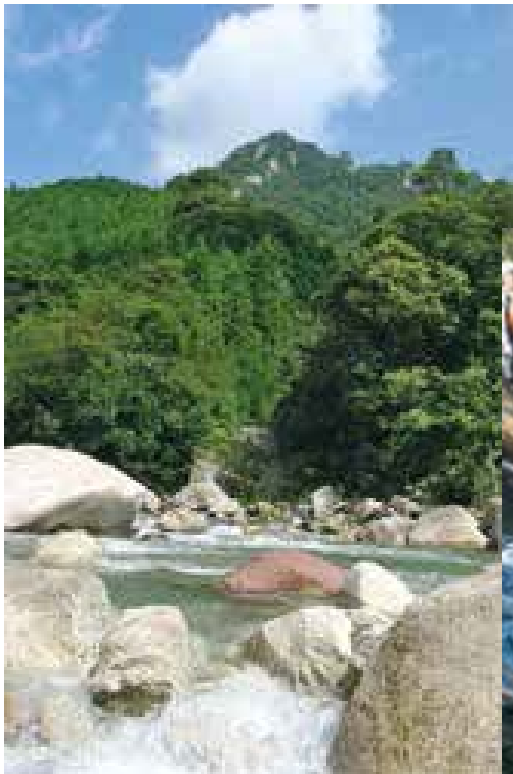
垂水中央病院に来られる患者さんたちは、ほとんどが地元の人たちで、ここに長く住んでいる方です。そのため、病院やそこで働く医師に対しても、親しみの気持ちをもっておられるように感じます。患者さんと医療者との信頼関係を築くのがスムーズで、治療への協力が得やすいように思います。

また、私が垂水出身と分かると、途端に地の言葉で話されたり、昔話に花が咲いたりすることも多く、地域のコミュニティーに根付いた医療というものを実感します。素朴なほのぼのとした交流が持てるのも、地方病院の魅力だと思います。

垂水中央病院は、東京の聖路加国際病院の研修協力病院になっていて、聖路加で働いている2年目の研修医の先生たちが、1か月間の地域医療研修を受けにやって来ます。毎回優秀でやる気のある研修医の先生たちが来るので、私たちにも良い刺激になっています。

これは、地域医療や高齢者医療に関心を持つ若い先生たちに現場で研鑽を積んでもらおうと、院長の安部智先生が熱心に進めてこられたものです。

このことは大隅が抱える高齢化や過疎化という問題が、地方に限ったことではなく、そのまま日本の縮図で、東京などの都会でも見過ごせないことだと感じている医療者が多いということです。都会での最先端医療に日々触れていた若い先生たちが、ここ垂水でも、都会では経験できないような多くのことを学んでいるのはとても心強いことです。



垂水市猿ヶ城溪谷

